# その一、同僚のいる夢を見た

ふ、と浮かび上がる感覚。あるいは沈んでいく感覚。どちらにしても伴うのは虚空感とも言うべき、地に足のついていない様な、体のどの部分もどこにも触れていない様な、何もかもから引き離された様なものだった。もっと言うなら自分に体があるのかさえ危うい様な虚無感。何もかもを失くしてしまったかの様な虚脱感。

ここは――……。

ここは、どこだろう、と。今はいつだろう、がかろうじて頭を過ぎっていった。過ぎって、行っただけ。答えはない。答えてくれる誰かは、どこにもいない。

自分で考えるしかないから、上手く回らない、寝起きの様な頭で必死に考えた。

目を開いている。何かが見えている。窓から明るい陽射しが横から差しこんで、男の表情はやや影になっている。男。そう、高級そうなスーツに身を包んだ男が対面にいる。こちらは簡易の、会議室にはよくあるタイプのテーブルを挟んで座っている。口が動く。滑らかな声で抑揚で何かが話される。どうやら何事かを説明しているらしい。指先がテーブルの上の何かを示す。グラフを多用いた資料。

そうか、今は商談の最中だ。

なら対面の相手は大きな取引先、そこの責任者として今日、僕たちを迎え入れてくれた男。確か名前は裴世清。珍しい名前。どこで区切るかは忘れた。僕が個人的に相手をすることはないからと、名刺だけ交換して、忘れてしまった。

# その二、級友のいる夢を見た

意識が沈む瞬間がある。それは予期なく予測なく予告なく、こちらの都合さえ無視して訪れるから、僕は時々困らされる。

今みたいに。特に暑くもない、むしろ涼しいと言ってもいい程の穏やかな天気、過ごしやすい日にも関わらず所構わずぶっ倒れては、周囲の人に心配をかける。

呼ぶ声がする。体を揺すぶられるのを不快にすら思う。こう言った場合、大体思考は良好なのも問題だった。ああ倒れたのだな。また僕はやってしまったのだな、とどこか冷静に考えている。身体は指先ひとつ自由にならない。僕を呼ぶ声に、何でもないことを証明する必要があるのに。

動かないままの身体が、ふわりと持ち上がった。

どうやら誰かに担ぎ上げられたみたいだ。

「はい、センセー！　僕が保健室に連れて行きまーす！」

「あっ南淵ずるい何それ自分だけ先生僕が！」

「先生、保健委員は僕です」

「おい十二位しゃしゃり出てくんな。あと玄理お前権力を傘に何て事を。つうかお前運べるだけの腕力ないだろ」

「十二位って言うなまだビリって言われた方がましだ」

「僕一人じゃ無理でも誰かもうひとりくらいいれば運べるかもしれないし。十二位君とか」

「てことで僕と高向で決まりでしょ。南淵はお呼びじゃないんだよ」

「ずるいのはお前だろなんで玄理は十二位でいいんだよ」

「いや高向じゃしょうがないじゃん」

# その三、店番をする夢を見た

本屋の仕事は忙しい。なにせ店主が働かない。従業員は僕と、あと授業後の高校生一人。必然的に全ての仕事が、晴れて僕に巡ってくるという素晴らしい仕組みだ。蹴るぞ。

本屋は家も兼ねていたから、休憩室として開放された部屋に荷物を放りエプロンをつけ、必要な道具をポケットにねじ込み、仕事場に赴く前に高いびきのする布団を踏みつける事も欠かさない。嫌に哀れっぽい声が聞こえた気がするけど、きっと気のせいだ。開店まで後もう少しなのだから、そんなところに人がいる訳がない。

簡単に店内の清掃をして、棚の乱れを整え、在庫を確認して時間になればシャッターを開ける。

日差しが眩しかった。空が恐ろしいほどに青くって、こんな日は、仕事なんか投げ捨ててピクニックにでも出かけたい。

「ねえお弁当作ってよ。台所貸すから。天気もいいし、サボっちゃおう。今日は仕事休みます！　どこか遠くにでも行こう。私ピザが良い」

背後から僕の願望を肯定する声がした気がしたけど、きっと気のせいだ。雇い主であるべき店主がそんな事を言うはずない。

背後に立っていた人物をぐいぐいレジに押し込んだ。何かと行く先々に現れて雑談を振り、仕事の進行を妨げるお荷物は、ここに置いておくのがちょうどいい。

また在庫のチェック、それから今日の配本に備えて（今度は文字通り）荷物の整理を始めた僕に、

「ちぇ。仕事男め。だからもてないんだ」

# その四、花束を贈る夢を見た

働き始めてかなり初期に、花言葉について勉強させられた。
花の扱い方手入れの仕方、管理の方法の他ラッピングの練習など、やることも覚えることも多い時期だったから、少し大変だった。
ただ、ひとつ、ふたつと覚え始めれば興味が先に立ち、次々と花関係の本を読み漁った。天体にはまった時と同じだった。元から物事の由来や意味を知る事が好きだった。
点と点を繋いで神話を語るように、色と香りを結んで手紙の様に書き上げた。
どんな言葉だって伝えられるし、どんな思いだって託せるのだと信じていた。相手に届かなくても構わない。むしろ送り主でさえ、自分の抱えた束の意味に、気付くことはないだろう。
ほんのちょっと、いたずらをする気持ちで花を選んで、束にした。見た目は綺麗に、鮮やかに。その下に刺の様ないたずらを潜ませて。
だけど、もしかしていつの日か。
正しく理解される事があるのなら。
これ以上、望む事はないかも知れなかった。

「やあ、こんにちは」
「……どうも」
接客としては落第だろう、頭をおざなりに少し傾けて見せただけ。僕は花の手入れの手を止めないで、その客に対応した。
彼は構わないようだった。